

宝の木の由来 国立栃木病院正門前の珍木

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司



国立栃木病院の宝の木



江戸期現群馬県明和町からの
移住者が勧請した長良神社

国立栃木病院の正門を入ったすぐの右手に、高さ約十メートル、周囲約一メートル程の木が植栽されている。木に掲げられている名札によればコノチカシワという木で、かつて宝の木と呼ばれ、宝木町の由来となった珍木である。

この木は、もともと六軒(中丸)地内にあった「大塚」と称する塚の上に生えていたものという。地元民にとっては木の種類もわからない珍しい木であるところから宝の木として親しまれてきたのである。

ところでこの宝の木の由来を語るためには、この地域一帯の開発から話をしなければならぬ。

宝の木のあった六軒をはじめ日光街道西側の藤岡、西岡、江黒、細谷、足次、高谷林、野沢、仁良塚、山崎の集落を「西原十カ新田」という。江戸時代寛文の頃開かれた集落である。当時、宇都宮城下の西側の地域は俗に西原と呼ばれ、人家はほとんどな

く雑木林が広がる土地だった。この地域は、火山灰台地で、雨水は地中に浸透しやすく、地下水脈も深く水利の悪い所である。十七世紀、そうした不毛の台地の一部が開発された。開発を手掛けたのは、江戸の商人、加藤四郎兵衛・小黒善兵衛・久保新兵衛・栗本長右衛門の四人である。寛文八(二六六八)年、宇都宮藩主となつた松平忠弘は、新田開発の願いを取り上げ、彼ら四人を西原八三〇町の元締め役とした。彼らは早速、高谷林に元締め会所を建て、江戸日本橋に新田農民募集の高札を立てた。そして寛文一〇(二六七〇)年新田開発が開始されたのである。

ところが前述したように、西原の地は、水に恵まれない土地、入植者は水不足に悩まされたのである。生産性は低く粟を主食とする貧しい生活に耐えられず脱落する者も現れた。文政年中(二八一八〜三〇)六軒、

山崎新田では脱落者が多発し忘村同様にうた。

こうした状況が改善されたのは、安政六(二八五九)年、田川から水を引いた念願の五か村用水、後の宝木用水が完成してからである。

それによつて人々の暮らしは、楽になった。そういうするうち明治八年、西原十カ新田が合併することになった。新しい地名を宝木村とした。件の宝の木にちなんだものである。それが現在国立栃木病院の中にあるのは、さらに次のような出来事があったからである。

明治四〇年、旧国本村宝木地内に陸軍第十四師団のうち、師団司令部、衛戍病院、歩兵第五十九連隊、六十六連隊、練兵場が設置された。日露戦争の勝利に湧く最中、その戦争で活躍した第十四師団の中枢機能が宝木の地に設置されたのであるから、人々の喜びようは、想像に難くない。当時、宝の木の所有者は、そうした地元民の喜び、祝福の気持ちも相まって師団司令部設置の際、司令部の庭木として寄贈したのであった。戦後、軍は解体され、師団司令部跡が国立栃木病院となったという次第である。

この宝の木は、推定樹齢四百年ともいわれる。西原十カ新田が開発されて三百四十二年、つまりそれ以前からあった木ということになる。この地の歴史の変遷を目の当たりにしてきた。木は黙して語らないが、あまりの変わりようにさぞかし驚いているに違いない。